
星の使徒 ～古の賢人～

円入健策

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の使徒 ～古の賢人～

【Nコード】

N0795BA

【作者名】

円入健策

【あらすじ】

時の止まった少年は、一つの剣によって導かれ、剣のように気高く何ものをも貫く強い意志を持って、自ら心を取り戻した。
滅亡の使者、安倍神一を倒し、漆黒の霧につつまれた世界に再び光を照らし出し、
彼は何処かへ消えてしまった。

ヨハネを愛したエレミアは、毎年、彼の誕生日である7月7日に、

星のよく見える山へ行き、帰りを待っていた。だが、彼は再び姿を見せなかった。

エレミアは魔術学園ポラリスを卒業。その後、学園の超能力学部
の講師に就職した。

時と共に成長を重ねるエレミアであったが、彼女の思いは変わらなかった。

ある日、エレミアは天才少年カールと再会し、相談を持ち掛ける。カールは過去の世界に渡ることの出来るタイムマシンの話をし始めた。

しかし、歴史を変えてしまう恐れを知っているため、途中で話をやめてごまかした。

気になるエレミア。再び話を掘り起こそうとするが、カールは「な
んでもないよ」と

口を閉ざす。仕方なく、エレミアはカールと別れ、研究所を去ろう
とした。

しかし、彼女の野望は抑えられることはなく、
関係者以外立ち入ってはならない区域をくまなく調べた。

やがて、一つの実験室を見つけた。そこには製作途中であるタイ
ムマシンがあった。

「もしかしたら、このタイムマシンを使えば過去に戻ってヨハネに
会えるかもしれない」

確信したエレミアは勝手にタイムマシンに乗り込み、電源をオンに
して、

起動させてしまった。何かの拍子に機体に支障が生じ、警告音が鳴
り響く。

警告音を聞いて駆けつけたカールは降りるように叫んだが、
エレミアの固い意志には届かない。

タイムマシンは眩い光を發し、エレミアの姿を消してしまった・・・。
慌てふためくカール。

タイムマシンによって飛ばされたエレミアの運命は果たして・・・。

オープニング

オープニング

滅亡の使者、安倍神一が待ちつける宇宙ステーション。

ヨハネたちは彼の目の前に立ち、今まさに激戦を繰り広げている最中だ。

神一はエンの猛攻に追い込まれ、醜い真の姿をさらけ出す。

自暴自棄になってしまった彼の行動によって宇宙ステーションの自爆システムが作動。

爆発まであと15分。ヨハネはみんなを逃すため、神一の攻撃を食い止める。

エレミアと一緒に逃げようと言い、その場をためらっている。

「早くいけええええー！」

ヨハネの叫ぶ声によって服従するかのように、仲間たちは逃げ去った。

再び振り返ったエレミアの顔を見て、ヨハネは笑顔で返した。

エレミアは胸が締め付けられそうになり、一度足を止めてしまったが、

感情を振り切って、すぐさまその場を去った……。

あれからどのくらい経ったのだろうか。

かならず……、必ずヨハネは帰ってくる。

いつもの日常に戻り、不安定な精神の中で何とか自分を保っている。いろんなバイトをして、たくさん勉強もした。

夢であった、魔術学園ポラリスの超能力学部講師にもなった。休む暇もない日々を送ったが、唯一、ヨハネのことだけは忘れなかった。

ヨハネの誕生日である7月7日。

エレミアは綺麗な星の景色が見渡せる観光スポット、星降る山に登り、

ヨハネの帰りを待っていた。

しかし、いつも返事として帰ってくるのは、星の輝きと月の微笑みだけであった。

時は進んでゆき、エレミアが二十歳になったころ、

あきらめずにもう一度、星降る山に登って空を見上げた。

今年もおなじ星空。だめかな……。ヨハネに逢いたい……。

切ない気持ちでいっぱいになり、涙をこぼした。その時、一つの流れ星が流れていった。

その流れ星はまるでエレミアを励ましているかのようだ。

もう一度逢えますように……。

そう願いをこめたエレミアはいつの間にか元気を取り戻していた。

日曜日。エレミアは休みを利用して、ある人物のもとへ会いに行くところである。

「今から行くね」と電話をして家を出た。鼻歌を歌いながら、玄関の門を閉める。

今日は特別に気分が良い。そのわけは、この前の星降る山で流れ星を見たときに、

とあることを思いついたからだ。その計画を実行するためにドイツ

へ旅立つ。

着いたところはアストラル大学。そう、あの天才少年カールと会う約束をしていたのだ。

待合場所で約束していた一階の院内自然庭園へ移動した。

そのなかに緑色のベンチがあり、そこにカールが座って待っている。

カールはエレミアに気付いて走りよってきた。

「ミアねえちゃん、久しぶり！」

「ひさしぶりだね！元気してた？」

二人はベンチに座り、久々に再開した喜びを分かち合っている。エレミアが講師になったこと、カールが名誉教授になったこと、互いに今まであった出来事を話していた。

会話のネタがそろそろなくなって来たとき、

エレミアは本来の目的である、あることを聞き出す。

「あのね、カールくん、ちょっと聞きたいことがあるの。」

「うん、なに？」

「昔に戻ることって出来る・・・？」

あまりにも唐突な質問であったが、カールは気にもせず答えた。

「もちろん可能だよ。時空移動が簡単にできるタイムマシンを・・・」

カールは熱意にタイムマシンを語り始めようと思ったが、エレミアの思考を読んで、語らずにはいられない欲を抑えつつ話を絶った。

おそらくはヨハネと再会するために過去に戻るのであろう。

そうならば、たった髪の毛一本のような些細な出来事に触れてしまえば、歴史を大きく変えることに繋がってしまう。それを恐れたカールは、なんとかごまかそうと嘘をついた。

「あくでも、まだ実験段階中で、実際に僕らが使える状態じゃないんだ。

200%の安全な結果が得られるまでには、まだまだ時間がかかるんだ。」

「そうなんだ……。」

エレミアは沈んだ表情を見せた。カールはエレミアの気持ちを考えて言葉をおくる。

「ミアねえちゃん、元氣だして。

僕も歩む道に大きな壁が立ちふさがって何をしてもだめな時、新しい道を作って前に進んできた。

ミアねえちゃんも新しい道を作ってみるといいよ。」

「……うん。ありがとう、カールくん。」

約束の時間が過ぎようとしていた。名誉教授となったカールのスケジュールは

ぎっしりつまっていて、ようやく手にした憩いの時間であった。

二人はベンチから立ち、わかれの挨拶をした。

「ありがとう、カールくん。せつかくの自由な時間なのに。」

「ううん、いいんだよ。ミアねえちゃんに会えてよかった！

こんどは一緒になにか遊ぼうね！」

「うん！」

カールは名残おしそうに、手を何度も振って行ってしまった。

エレミアは少し微笑んでいた。先ほどカールが嘘をついていたことに気がついていたので。氣遣ってくれたカールにありがとうと心でつぶやいた。

「私ってちょっと性悪かな。」

そう思いながら、さきほど超能力の一つ「マインドハック」でカールのイメージから見えていたタイムマシンの場所へ向かおうと試みた。

だが、その行く場所の途中では何名もの研究者や警備員がうろついている。

見つければ追い出されるに決まっている。

そんなこともあるのかと、エレミアはインビジブルポーションという、

透明人間になれる薬を持ってきた。

自然庭園の茂みの中に隠れて、ポシエットから薬を取り出して飲んだ。

みるみるうちにエレミアの姿が消えていく。

「これで大丈夫ね。効果が切れる前に早く行かなくちゃ。」

エレミアはカールのイメージを頼りに、進んでいった。

以前行ったことのある工学部の前だ。もちろん扉にはセキュリティでロックされている。

後ろから研究員がやってきて、認証を済ませると扉が開いた。

そのチャンスを見計らって、一緒に奥へと入っていった。

東京ドーム一個分の広さを持つロボット研究開発施設。

その中に特設された部屋がある。

『タイムマシン研究室』

この部屋には特別配属された研究員でしか入ることが出来ないようだ。

エレミアは鉄の自動ドアの目の前に立ち、腕を組み、どうしようかと考えていた。

「早くしないと薬の効果が消えちゃうし……、どうしよう……。」

「

考えているうちに、いきなり自動ドアが開いて中から研究員が出てきた。

エレミアはわずか数センチ手前にいるハゲた研究員の顔をみて思わず声を出してしまった。

「うわっ！」

研究員はその声に驚いてあたりを見回した。

エレミアは手に口を添えて、そっと部屋の中へ侵入していった。

(あゝびつくりした。いけない、いけない……)

でもよかった。入ることができて……)

自動ドアが閉まり、ガシャンとロックがかかる。

いくら透明人間になったとはいえ、心臓のドキドキはおさまることを知らない。

ようやくタイムマシンとのご対面。

白銀のボディー。外郭には巨大リングのようなものがついている。

中には一人用の座り心地のよさそうなソファーのような椅子があり、乗り込んで内部の操作パネルでマシンを扱うようだ。

幸運にも、今出て行った研究員以外に誰もいないようだ。インビジブルポーションの効果もちょうど切れた。

「いましかないわ。」

エレミアはタイムマシンに乗り込んだ。それと同時にオートでタイムマシンが稼動する。

グーン・・・ シュウイーーーーン・・・

手前にあるタッチパネルに明かりがともり、無機質な音声ガイドが流れる。

『こんにちは。時空旅行をお楽しみください。今日はどちらへ向かわれますか？』

パネルに過去と未来の文字がうつしだされた。エレミアは過去のボタンをタッチした。

『過去ですね。忘れそうになったあの時の思い出、再び体感して心に刻みましょう。』

次に、行き先となる年月日、時間を設定してください。』

「うーん、4年前だったらヨハネもまだ家にいる頃だと思っし・・・きめたっ！」

エレミアは今から4年前の時間を設定した。

『確認してください。以上の設定で過去へタイムワープします。内容がよろしければ、確定ボタンをタッチしてください。』

エレミアは満天の笑みを浮かべながら、確定ボタンをタッチした。

「やっとこれでヨハネに逢えるんだ・・・！」

タイムマシンのエンジン音が大きくなり、外郭のリングが高速回転を始める。

『それでは良い旅を。』

嬉しさのあまり、待ちきれなくて足をぶらつかせている。

タイムマシンのあたりに白い光で包まれる。

部屋の景色が、覆われている光によって見えなくなるその時である。

ガンッ！

ぶらつかせていたエレミアの足が激しく機体にぶつかってしまった！その衝撃でタイムマシンは誤作動をおこし、警告音が鳴り始めた。

ピュイピュイピュイピュイピュイ・・・

「あれ？私なにかマズいことしちゃったかしら・・・？」

この警告音がロボット研究開発施設のメインルームに伝わってしまった！

ちょうどそこにカールがプロジェクトチームと会議をしていたころだった。

突発的な警告音を耳にした一同。カールは椅子から立ち上がった。

「ま、まさか、ミアねえちゃん！」

急いでカールと数名の研究員はタイムマシン研究室へ駆けつけた！

「ミアねえちゃん、はやく赤い緊急停止ボタンをおすんだ！」

エレミアは緊急停止ボタンの場所を目だけで確認した。

・・・しかし、カールの声が聞こえていないふりをして、動かずにじっとしている。せっかく手に入れたチャンス、絶対に失いたくない。

タイムマシンから眩しいくらいの光が発し、とうとうエレミアを過去におくってしまった。

カールはただ呆然と立ち尽くす。

「ああ・・・どうしよう・・・。大変なことになっちゃった・・・。

」

エレミアはタイムマシンに座っている。

周りの景色は真っ白で、時たま過去に目にした人物、建物、風景が下から上へと

飛んでいく。どんどん過去にさかのぼっていく。

ヨハネの姿が見えた。

しかしそれを通り過ぎてしまい、更に深い谷底に落ちていくような感覚を味わう。

「あっ！ヨハ・・・どこまで行っちゃうの？4年前に設定してたのに!？」

エレミアはタイムマシンのパネルを再確認した。

『415年3月21日』

「415ねん?!どういうこと?・・・あっ、まさか・・・」

エレミアは思い出した。

足をぶらつかせていた時、機体に思い切りキックしてしまったことを。

頭を抱えながら、やってしまったことに後悔を感じている。

「どうしよう・・・私この先どうなっちゃうの・・・?」

ガタガタガタ・・・

機体から音がする。

何だろうと思ひ、機体の周りを見た。

大変なことに、まるでスペースシャトルが切り離しをするかのよう

に、一つずつ部品が外れて行き、時空の狭間に飛んで行っているではないか。

「このままじゃ私も消えちゃう！たすけて〜！」

最後に椅子だけが残り、その椅子も消えてしまったその時、
真っ白いあたりの景色が見たことのない木造の屋内へと入れ替わり、
エレミアは強烈なしりもちをついた。

ドスンッ！！

「いった〜い……。助かったみたい……。」

薄暗い部屋にはいくつもの研究物資が並んでいて、少しホコリくさ
かった。

ここは小さい一軒家のようだ。そして誰かが何らかの目的で研究を
行っていたらしい。

エレミアはおしりをさすりながら、目先に見える扉へ歩いていった。
この扉を開けるとどんな世界が待ち受けているのであろうか。
もとのいた時代に戻ることができるのだろうか。

そして……。ヨハネと再び逢うことができるのであろうか……。
彼女の壮大な冒険が、今、始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795ba/>

星の使徒 ~古の賢人~

2012年1月1日22時31分発行